

令和3年12月24日

佐賀大学学長 殿

肥前セラミック研究センター長
矢田 光徳

令和2年度教員個人評価の集計・分析について報告します。

1. 個人評価の実施状況

(1) 対象教員数、個人評価実施者数、実施率

対象教員数：2名（准教授1名、助教1名）

個人評価実施者数：2名

実施率：100%

(2) 教員個人評価の実施概要（評価組織の構成、実施内容、方法など）

評価組織の構成

センターの個人評価の実施に係る評価組織は、肥前セラミック研究センター評価委員会とした。評価委員会の構成は以下の通りである。

1) センター長 1名（矢田光徳）

2) 副センター長 2名（有馬隆文、三木悦子）

実施内容及び方法

「佐賀大学肥前セラミック研究センターにおける教員の個人評価に関する実施基準」及び「肥前セラミック研究センター教員個人評価実施要項」に基づき、令和2年度の活動実績について、4つの領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営）の個人評価を行った。また、研究部門や研究内容が異なる各教員の個性を生かす評価を行うために、予め各自が自主的に自己の職務の専門性・特殊性等を勘案して各領域における達成目標及び「重み」配分を設定して申告し、その申告に対して自己点検、評価を行った。

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

2名の教員の自己点検評価結果及び部局評価を以下の表1に示す。

表1 自己点検評価結果及び部局評価の一覧表

審査領域	分布			
	重み ^{※1} (0-1)	達成率 (%)	自己評価 ^{※2} (1-5)	部局評価 ^{※2} (1-5)
教育	0-0.1	60 ^{※3}	3 ^{※3}	4 ^{※3}
研究	0.6	70-100	3-4	3-4
国際交流・社会貢献	0.1-0.3	70-100	3	3-4
組織運営	0.1-0.2	70-100	2-3	3

※1 重みはすべての審査領域分を加えると1になるように設定している。

※2 自己評価及び部局評価は以下の5段階で行った。

5：特に優れている，4：優れている，3：おおむね良好，2：改善の余地がある，1：改善を要する

※3 教育に関する、達成率、自己評価、部局評価は重み0の教員分の数値は記載していない。

教員A,Bともに、肥前セラミック研究センターが「研究センター」であることを強く意識して、「研究」の重みを大きめな数値である「0.6」に設定していることが特徴である。また、教員A,Bともに、配属されている学生はおらず、また、任期も3年未満と短いために講義を担当しておらず、「教育」の重みは「0～0.1」と小さいことも特徴である。「国際交流・社会貢献」と「組織運営」の重みを含めたこれらの重みづけはおおむね妥当であると考えられる。

教員Aは、自らを厳しく律して高い目標を掲げているため「達成率」と「自己評価」を厳しめにつけている傾向が見られたが、客観的にはそのような低い達成率や自己評価は決して正しくなく、評価委員会としては高く評価している。教員Bの自己評価と部局評価はおおむね一致していた。2名の教員の部局評価は3～4であり、着任1年目ではあるが、いずれの項目でも着実に成果をあげている。

以上のことから、2名の教員ともに自らに期待される役割を正しく理解してきちんとした責任感を持って業務にあたっていることがわかる。以下に、4つの審査領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営）の評価の詳細を記す。

（1）教育の領域の評価

いずれの教員も、担当する講義はなく、直接指導する学生もいないが、教育に関して自らができることを考えて実行に移しており、その姿勢と実績は高く評価できる。

・教員Aは、ワークショップの開催と有田セラミック分野の学生へのアドバイスを行うことを目標とした。ワークショップの開催に関しては、「お正月飾りワークショップ」と「有田STEAM講座」を開催している。「お正月飾りワークショップ」では地域の園児及びその関係者を対象とし、「有田STEAM講座」では本学ダイバーシティ推進室及び理工学部の教員及び学生と連携して地域の女子中学生を対象として実施され、いずれも非常に好評であり、新聞や地元ケーブルテレビでも紹介され、本学の存在感を高めた。また、本学学生へのアドバイスも実施している。

・教員Bは、研究グループに留学生や交換生等を受入れて講義と指導を行うことを目標としていたが達成できなかった。これは、教員Bは11月に着任したばかりで今年度はあまり活動時間がなかったことや新型コロナウイルス問題によると考えられ、目標を達成できなかったことは致し方ない。次年度にむけて、海外の大学関係者と積極的に連絡を取っており、今後を期待したい。

（2）研究の領域の評価

いずれの教員も以下に記すように適切に研究を実施して、着実に成果をあげるとともに、次年度以降につながる活動行っており、高く評価できる。

・教員Aは、①地域関係者のヒアリング、②窯業と他分野の協働プロセスの実践的研究、③新しい図書サービスの実践的研究等を実施した。①に関しては、窯業関係者のみならず、地域の行政や教育や農業や文化等の関係者と積極的に意見交換を行い、次年度以降の研究基盤を構築に成功

した。②に関しては、窯業といけばなどのコラボレーションによる新市場参入への取組みにおける協働プロセスの実践的研究のベースとなる枠組みを立ち上げた。③に関しては、書籍紹介リーフレットを3回発行した。

・教員 B は、陶磁器素材の開発に関し、①原著論文1件と学会発表・講演1件、②地域の共同研究の実施を目標とした。①は目標を達成しており、一見少なく見えるかもしれないが、11月の着任であったことを考慮すると目標の設定は妥当であり、適切に成果をあげている。②に関しては、佐賀県窯業技術センター等との共同研究が実施されている。

(3) 国際交流・社会貢献の評価

いずれの教員も、それぞれの特長を活かした活動を十分に実施しており、高く評価できる。

・教員 A は、①本学教員とのコラボレーションによる活動、②技術相談、③人材交流を目標とした。①に関しては芸術地域デザイン学部教員と協力して、2020 読売国際協力賞受賞記念ピンバッジ制作を開始した。②に関しては、窯業関係者の技術相談に精力的に応じている。③に関しては、数多くの地域の窯業や農業の関係者と交流し、次年度以降の研究基盤を構築した。

・教員 B は、語学力を生かして、①海外の大学等との国際交流、②国際シンポジウム開催に向けた交渉、②地域との共同研究を目標とし、いずれも目標を達成している。①と②に関しては、景德镇陶瓷大学及び韓国窯業技術院との間で活動が実施され、③に関しても佐賀県窯業技術センターや地元企業との共同研究や本学の有田町を対象とした特定プロジェクト研究に参画した。

(4) 組織運営の評価

いずれの教員も、自らに課せられた組織運営業務を誠実にこなし、これまで専任教員がいないために脆弱であったセンターの組織運営体制の強化に大きく貢献してくれた。また、出席が必要な各種会議にはきちんと出席するとともに、他のセンター教職員と協力して種々の業務にあたっている。これらの姿勢と実績は高く評価できる。

・教員 A は、①広報物（活動報告書・教員ガイドブック等）の作成と広報活動の実施、②センター内の情報の体系化と効率的運用法の検討等を主な目標とした。①に関しては、活動報告書の編集で中心的な役割を果たして大幅リニューアルに成功した。教員ガイドブックの編集にも大きな貢献を果たした。また、これらを用いた広報活動にも尽力した。②に関しては、センター内での会議で積極的に的確な提案を行ってきた。

・教員 B は、①英語版広報資料の作成、②SPACE-ARITA への貢献等を主な目標とした。①については、センターを紹介する英語版パワーポイントファイルを作成するとともに、有田キャンパスを紹介する英語動画ファイルの作成に協力した。②に関しては、新型コロナウイルス問題のために留学生の受け入れがなかったため、実行できなかった。